《翻　訳》

ポルトガル共和国国歌『ア・ポルトゥゲーザ』を和訳する
――ポルトガルのユーロ 2016 制覇を祝して――

Uma tradução japonesa do Hino Nacional da República Portuguesa *A Portuguesa*: Em comemoração da vitória da Selecção Portuguesa de Futebol no Campeonato EURO 2016, França.

日埜 博司（Hino Hiroshi）

2016 年夏はポルトガルとポルトガル語に絡んでちょっとした慶事があった。

それは言うまでもなく，ムンディアール（Mundial. ワールドカップのこと。ブラジルではコパ・ド・ムンド Copa do Mundo という）以上にハイレヴェルとされる（確かにそうだろう）欧州フットボール最高の檜舞台 EURO 2016 フランス大会でポルトガルが優勝したこと（ブラジルが 2014 年に大屈辱を味わわされたドイツを破り，リオ五輪で金メダルを獲得したことも，まあ慶事ではあろうが，ベストメンバーの出場しないオリンピックなど格においてユーロの比ではない）。

苦しみつつ決勝に進んだポルトガルの相手は開催国フランス。クリスティアーノ・ロナルド（ロナウドにあらず。テレビ屋は相変わらずだが，『朝日』と『讀賣』は，感心なことに「ロナルド」と記している）が早々に負傷退場する中で勝利したことも嬉しかったが，何より感銘を受けたのは，試合前のセレモニーで，フランスの混声合唱団（少年少女も含まれていた）がポルトガル国歌をきちんと斉唱したこと。混声合唱団にとり，ポルトガル国歌を覚えるのに与えられた時間は 3 日もなかったはずだ。

この行為にどれほどの反響があったのか，詳しくは知らないが，ともかく，従来あまり類例のない（直接話を聞いた複数のポルトガル人も，こんな例は見たことがないと言っていた）美挙であったことだけは間違いない。

最近やっとこの国歌を歌えるようになった（ただし一番のみ）私でさえ，彼らがこれを完璧に斉唱していたことは，その唇の動きや，何より彼らの肉声から完全に読み取ることができた。決勝へ勝ち上がった代表がポーランドであってもクロアティアであってもはたまたウェールズ（ならばケルト語系のウェールズ語！）であっても，彼らの対応は変わらなかったろう。

フランス語とポルトガル語は，ラテン語を母として系統を同じくする姉妹語。だからフラン

ス人にとって，ポルトガル国歌の斉唱はより容易ではある。問題はしかし，そういうことではない。前述の行為は他言語に対するフランス人の懐の深さを示す，という以上に，彼らがみずからの母語に懐く限りない尊重（respect. ポルトガル語なら respeito）と矜持（pride. ポルトガル語なら orgulho）の所産であるように，私には思われたのだ。みずからが尊重するもの（フランス国歌ひいてはフランス語）であるからこそ，相手が大切にするもの（ポルトガル国歌ひいてはポルトガル語）を，同一の丁重さで扱う。あのような場で敵国（？）の国歌をきちんと斉唱する雅量は，すばらしい，の一語に尽きる（開催地がポルトガルで，決勝の組み合わせが同一だったとして，同じことをポルトガル人はやれたかな，とポルトガル贔屓の私も，少々気に懸かります）。

というわけでポルトガルのユーロ初制覇を勝手に祝うため，Hino Nacional da República Portuguesa（ポルトガル共和国国歌）を和訳する。曲名は『ア・ポルトゥゲーザ』（*A Portuguesa*）。作詞エンリケ・ロペス・デ・メンドンサ（Henrique Lopes de Mendonça），作曲アルフレッド・ケイル（Alfredo Keil）。1890 年の作品である。前記 Hino の h は，発音されず近似音ながら**イ**ーノと言えば通じるだろう（ゴチックに強勢アクセント）。**イ**ーノ・ナスィオ**ナ**ール・ダ・レ**プ**ブリカ・ポルトゥ**ゲ**ーザ（ゴチックにアクセント。小書きした「ル」は上部歯茎裏側に舌先を軽く接しつつ発音。日本語の「ル」とは異なる。下線を施した「レ」は巻き舌音）。

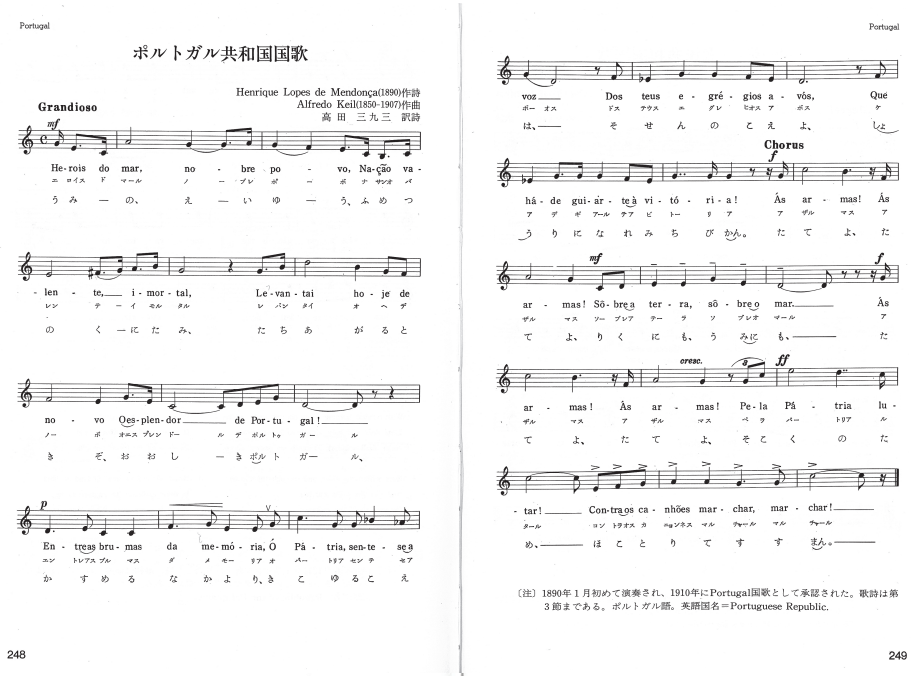
ところで世の中には奇特な方がいるものだ。

世界の実に 188 ヵ国の国歌を採集し，これを楽譜に書きとめた高田三九三という方。高田はそれぞれの歌詞を原語に近いカタカナで記すとともに，荘厳勇壮な歌曲として謳うにふさわしい格調をもって高田みずから仕立てた和訳を楽譜に附す。その編著『世界の国歌全集 1989 年版』（共同音楽出版社，1989 年）に記された編者略歴によると，高田は，1906 年東京に生まれ，東京外国語大学仏文科卒。さらに「世界の国歌・民謡・童謡などの訳詞多数。童謡『かかしの願いごと』の作詞で，1961 年第 3 回レコード大賞童謡賞を受けた」とある。

驚いたことに，前出ウェールズの国歌 Hen Wlad fy Nhadau〔祖先の土地〕も，この書物の 334 頁に収載されている。むろん正式の国歌は連合王国のそれである，と但し書きに見えるものの，この国歌で用いられる歌詞は当然ながら，英語とは似ても似つかぬウェールズ語。ポルトガルとの準決勝で斉唱されたのがこれだ（我ながらマニアックだがこの試合は録画してあり，そこで歌われたウェールズ国歌を何度も楽譜で追って確認したから間違いナシ）。日常生活において現実的有用性を失ってはいても，ウェールズ固有の言葉をこうして民族的プライドの象徴として護持する姿勢は，もって範とすべきだろうと，私は信ずる。特定の言語偏重

は，盲目的にそれを受け入れた者ひとりひとりの世界観を知らぬ間に毀損（きそん）する。

ポルトガル国歌楽譜（附，和訳およびカタカタ読み）の載録された箇所を掲げることを許されたい。



〔注〕1890年1月初めて演奏され、1910年にPortugal国歌として承認された。歌詩は第3節まである。ポルトガル語。英語国名＝Portuguese Republic.

御覧のとおり高田訳は，日本語として長すぎず短すぎず荘重に謳い上げることに主眼の置かれたそれである。よってそのような訳詞に厳密な語学的正確さを求めること自体，そもそもヤボな注文である。実際のところ，語学的正確さという観点からすれば，高田訳は満足のゆくものでは必ずしもない。原語のカタカナ読みをイスパニア語風に附していることも，残念な誤りである（va, ve, vi, vo, vu を ba, be, bi, bo, bu と区別していない，gi や je や cha のカタカナ発音をイスパニア語風にしている，など）。しかし繰り返すが，188 ヵ国の国歌そのすべてを原語から訳すなど，通暁すべき言語のおびただしさに鑑（かんが）みれば（余談だが，この“言語”というコトバを“国語”と置き換えるのはよろしくない。理由は簡単だろう）素直に偉業と称（たた）えるほかはない。

ポルトガル共和国国歌に関しては，その公式訳が在日ポルトガル大使館によって確定されているわけではない。が，田所清克（たどころきよかつ）（京都外国語大学）が，私家版ポルトガル語単語熟語集の附録として収載した和訳が一種すでに存在する（一番のみ。正式には二番・三番が続き，最後に一番を歌い直して終わり，となるらしい。むろんほとんどのケースで一番しか歌わない）。私はこういう先行訳を見ると，オノレのことは棚に上げ，ポルトガル語の理解度やら和訳の完成

度やらを基準に，俄然愚にもつかぬ穿鑿を入れたくなる。まことにもって職業的悪癖と言うほかはないが，その対抗心も萎えるほど，田所訳は難癖つけようのない名訳であり，併載されたブラジル（連邦共和国）国歌のそれともども，脳裡に深く刻まれた。

田所清克訳に対し満腔の敬意を表しつつ敢えて今その訳を伏せ――名訳であるがゆえに大方は諳んじてしまっているのだが――，敵わぬとは承知しつつ，慶事をプライヴェートに寿ぐため，拙訳を別に仕立てることにする。

ポルトガルには，5 de Outubro（10 月 5 日）の名を冠した通りや広場が随所に存在する。これは 1910 年のこの日，共和国樹立（Implantação da República）が成就したことを記念するもの。1890 年初めて演奏され 1910 年正式に承認されたこの国歌はだから，共和制の理念とそれに託した希望を高らかに謳いあげる“共和国讃歌”にほかならない。歌詞に用いられた詩的にして象徴的な表現と語彙は，そのことを踏まえて訳さぬ限り，日本語としておよそ理解不可能となるであろう。

疑問を解くに際し温かい指導を賜わったのは，いつものことながら，ベイラ・インテリオール大学（Universidade da Beira Interior, Covilhã）のアナ・リタ・カリーリョ先生（Professora Ana Rita Carrilho. ポルトガル語戦略的教育法）である。心から信愛するリタ先生へ深謝を捧げる。二番・三番に関する限り先行和訳はないはずであり（人工知能だの自動翻訳だのによるものはどうだか知らないが，それが一般的にどのような惨状であるかは，心ある人なら御承知のとおり），フルヴァージョンのポルトガル共和国国歌和訳をおそらくは初めて成就し得たことを，リタ先生とともに喜ぶ。

〔1〕

渡津海の英雄，気高き民，	Heróis do mar, nobre povo,
豪胆にして不滅の邦。	Nação valente, e imortal
いましも新たに挙示せよ，	Levantai hoje de novo
葡萄牙が栄光のあかしを！	O esplendor de Portugal!
追憶の狭霧の切れ間より，	Entre as brumas da memória,
おお，祖国よ，耳朶に触れぬか，	Ó, Pátria, sente-se a voz,
汝が雄々しき父祖の，その声を！	Dos teus egrégios avós,
汝を勝利へと導く，その声を！	Que há-de guiar-te à vitória!
武器をとれ，いざ武器を！	Às armas, às armas!
陸にても，海にても。	Sobre a terra, sobre o mar.
武器をとれ，いざ武器を！	Às armas, às armas!
奮励せよ，祖国のため。	Pela Pátria lutar
大筒も物ならずや，いざ征け，いざ進め！	Contra os canhões, marchar, marchar!

〔2〕

必勝不敗の旗を，いざ翻せ，	Desfralda a invicta Bandeira,
汝が蒼天の生気満つる光へ！	À luz viva do teu céu!
欧洲の地に遍く闡明せよ，	Brade a Europa à terra inteira
我ら葡萄牙，嘗て滅したることなし，と。	Portugal não pereceu.
我は口づけぬ，清新の意気薫る，汝が共和の大地に。	Beijo o solo teu jucundo
蒼海また，その大義に欣喜す。	O Oceano, a rugir d’amor,
汝が勝者の腕もて，	O teu braço vencedor
旧来の世界へ添えられし幾多の新世界！	Deu mundos novos ao Mundo!
武器をとれ，いざ武器を！	Às armas, às armas!
陸にても，海にても。	Sobre a terra, sobre o mar.

武器をとれ，いざ武器を！
奮励せよ，祖国のため。
大筒(おおづつ)も物ならずや，いざ征(ゆ)け，いざ進め！

Às armas, às armas!
Pela Pátria lutar
Contra os canhões, marchar,
marchar!

〔3〕

微笑みの未来を指(さ)して立ち現われし
共和の日輪へ敬礼あれ。
これをして，忍苦の秋(とき)を偲(しの)ぶ木霊(こだま)たらしめ，
我が邦(くに)再興の狼煙(のろし)たらしめよ。
雄渾の極光(アウローラ)は共和の大義の如く，
その光は，母の口づけさながらに，
我らを護り，我らを育まん，
天運利あらずとも，何をか恐れん。
武器をとれ，いざ武器を！
陸(くが)にても，海にても。
武器をとれ，いざ武器を！
奮励せよ，祖国のため。
大筒(おおづつ)も物ならずや，いざ征(ゆ)け，いざ進め！

Saudai o Sol que desponta
Sobre um ridente porvir,
Seja o eco de uma afronta
O sinal do ressurgir.
Raios dessa aurora forte
São como beijos de mãe,
Que nos guardam, nos sustêm,
Contra as injúrias da sorte.
Às armas, às armas!
Sobre a terra, sobre o mar.
Às armas, às armas!
Pela Pátria lutar
Contra os canhões, marchar,
marchar!